

國學院大學學術情報リポジトリ

中国寧波市周辺の獅子舞

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 李, 広志, 大石, 泰夫, Li, Guangzhi, Oishi, Yasuo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000093

中国寧波市周辺の獅子舞

序—本論文の視座

日本における民俗芸能で、もともと広範囲で多くの分布を見ているのが、〈シシ系芸能〉である。日本の〈シシ系芸能〉は、数人で一頭のシシを演じるものと、一人が一頭のシシを演じるものとに大別されて理解されている。特に前者は、古代に中国から伝来した伎楽・舞楽・散楽に「師子」という演目が見られ、古代にこれらの芸能の一演目として日本に伝来し、広まり定着して、今日まで伝承されてきたと考えられている。

しかし、中国でも古代から今日まで形を変えながら獅子舞が

李 広志
大石泰夫

伝承されており、日本と中国の文化交流も古代以降途絶えているわけではない。断片的には、例えば「長崎くんち」に伝承される獅子舞などに、中国の獅子舞の直接的影響が指摘されているが、比較文化的な研究には至っていない。歴史学では、中国と日本の長い文化交流の歴史についての研究が一つの大きな潮流であるが、民俗文化研究はあまり進んでいるとは思われない。

その中で近年注目されているのが、中国浙江省寧波市を起点とした日中文化交流についての研究である。例えば、文部科学省特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成—

寧波を焦点とする学際的創生——(平成十七)二十一年度・研究代表小島毅・「にんぷろ」と略称)などは、その総合的な研究である。この中では、寧波市周辺と日本の葬送儀礼の比較研究的視座による成果も出された。改めて述べるまでもなく、寧波市は日本の遣唐使時代以来の中国との海域交流の玄関であり、特に中世の人と文化の交流はよく知られている。鑑真や阿倍仲麻呂に始まり、最澄・栄西・道元・雪舟など、寧波に関わる日本への中国文化の伝播に関わった著名人たちを挙げれば相당한数に上る。

そうした歴史と文化的背景にあって、古代から現代に至るまでもっとも広範囲で多くの分布を見せている〈シシ系芸能〉を、寧波と日本を結ぶ海域の文化交流という視点から研究してみようと筆者二人は考えている。先に掲げた「にんぷろ」でも寧波からの海域交流は奥州平泉までを視野においたが、私達も同様に海域交流を通じて日本全国の〈シシ系芸能〉に對し、通時的に中国文化の影響はあると考えている。

本稿は、こうした視座の研究の端緒として、現在の寧波市周辺の獅子舞の調査を行った成果を論じようというものである。

一、中国における獅子文化

紀元前一三八年、漢の武帝が張騫を西域に遣わし、中国と西域諸国との貿易ルート(シルクロード)を開拓した。このシルクロードが開通した後、中国には珍しい鳥獣が西アジア諸国から入ってきた。『漢書』西域伝には、「自是之後、明珠、文甲、通犀、翠羽之珍盈於後宮。蒲梢、竜文、魚目、汗血之馬充於黃門。巨象、師子、猛犬、大雀之群食之外浦圉」と記されている。この「師子」は獅子のことで、武帝の頃に獅子は外にある圉いに飼われており、その存在は人の知るところとなっていたようである。また、『後漢書』西域伝には、「章帝章和元年(八七)、遣使献師子、符拔」と皇帝に獅子を献じた記録があり、その後西域から獅子が献上された記録がしばしば見られる。

また、仏教の伝来・普及に伴い、仏教にとって獅子は欠かせないシンボルであり、仏典の中で様々な獅子が登場していることから、獅子のイメージは中国人の崇拜や信仰の対象となった。中国では鳥獣を瑞祥とする習俗があり、獅子は勇ましさと多彩な姿及び神秘的な性質をもっていることから、民間では次第に〈吉祥の動物〉とされた。後漢になると、獅子の像が誕生した。『水経注』卷三十一には、「塚西有石廟、廟前有両石決

闕、闕東有碑、闕南有二獅子相對」とあり、獅子を表現する彫刻が墓の両側に施されるようになった。

三国両晋南北朝時代では、犀、象、獅子、鸚鵡、駝鳥、孔雀などの珍しい珍獣が続々と中国に入ってくる。この時期には、寧波の獅子文化が磁器の彫塑に現れ、早期の越窯青磁には多くの獅子の造形が見られる。その表意には、招福辟邪の願いが込められていると思われる。紹興地方で出土した西晋墓には、長さ11cm、高さ8.2cmの「獅形燭台」があり、獅子の頭が繊細に彫刻され、脇には羽毛が刻まれ、四足直立、気魄雄大に表現し、背部に燭の穴が彫られている。また、余姚市梁輝九頂山にある西晋太康八年（二八七）の墓から出土した獅形燭台は、長さ12cm、高さ7.2cm、獅子は首を上げ目を見開き、齒をむき出しにする姿をし、背部に直穴の燭台が配置されている。³ 唐代では、康居国、波斯国、米国、吐火羅国などの国々が獅子を献上したという。唐代の獅子はさらに具体化し、古代から信仰された「狻猊」「虬」が獅子とみられるようになる。また、唐代の虞世南が『獅子賦』まで作っている。このように、唐代になると獅子文化は、文学・芸術・絵画・美術・彫刻などの分野に広く影響を与えていることが窺える。

宋代以降、獅子文化は民間信仰と融合して、多彩な姿を現し

ている。宋代の寧波では、石の彫刻技術が発達し、寧波における獅子の石造物は日本に輸出された。東大寺南大門に安置される石獅子は、寧波の匠人である伊行末ら四人によって造立された。奈良県宇陀市所在の大蔵寺層塔には延応二年（一一四〇）の年号と共に、「大唐銘州伊行末」と刻まれている。明州（銘州＝明州）とは、寧波の旧地名であり、伊行末が寧波出身であったことがわかる。また、般若寺等塔婆銘文には「陳和卿為鑄金銅大仏以明州伊行末為衆」と書かれている。⁴ そのほか、南宋（元代（十三世紀））に描かれたとされる京都大徳寺伝来の五百羅漢図には、寧波画人の周季常が描いた獅子の画幅が何枚もあり、京都泉涌寺の羅漢図には獅子に乗って天台山の石梁瀑布を渡る羅漢の姿も見える。⁵

一方、中国各地において獅子文化は多様化した。河南省鄭州では、宋代の「三彩獅子磁枕」が出土している。南京には「獅子橋」がある。寧波には寧海の宋代惠徳橋壁獅子が残されている。一一八九年に造立された北京の蘆溝橋には、四九八（五〇一とも）の異なる獅子の姿の彫像がある。また、蘇州には元代建造の獅子林が現在まで保存されている。

獅子の石の彫刻は、あらゆる宮殿、寺院、祠廟、仏塔、橋梁、邸宅、園林、陵墓などに使われるとともに、女性の嫁入り



写真1 清代の庄綳石獅 (李広志所蔵)

道具や印鑑の紐にまで刻まれている。

寧波地域における獅子の代表的な石造物は、明清時代から流行ってきた「庄綳獅」と呼ばれる小道具である。庄綳獅とは、女性が針仕事をするときに使っている小さな石獅子のことであり、手刺繍の際糸などを安定さ

せるために使用される道具である。よく見られる庄綳獅のサイズは長さ15cm、広さ10cm、高さ14cmである(写真1参照)。寧波方言では、「獅子」と「賜子」が同音で、女子が結婚するときの嫁入り道具として一对の立派な庄綳獅を実家からもらう。それには早く子供が授かるように、さらに針仕事の上達するようという、親の願いが込められている。この庄綳獅は、実家からの贈り物として、結婚した女性にとって一生の付き添い物となるのである。

以上、中国における獅子文化の歴史を概観し、寧波の実例を

取り上げつつ述べてみたが、中国の獅子文化の歴史は古く、生活の中に深く入り込んでいるといえよう。

二、中国の獅子舞の歴史

獅子が中国に伝来した後、獅子の動作を取り入れた新しい舞踊が生まれた。北魏(三八六―五三四年)の頃になると、洛陽の長秋寺で盛大な仏事活動が行われる際、獅子舞が「百戲」の中で演じられたという記録がある。北魏の楊衒之が撰した『洛陽伽藍記』の長秋寺の条に「四月四日、此像常出、辟邪獅子導引其前」とあるもので、この「辟邪獅子」は人間が扮した獅子に他ならない。そして、このように「辟邪進慶」を願う人工的な獅子と、仏教とともに発達した獅子のイメージの普及によって、少なくとも北魏の時代に獅子舞が生まれたと考えられる。

唐代にいたって、宮廷の中では一定のルールに従って、定型的な芸態の獅子舞の競技を行うようになった。『旧唐書』卷三十三には、「太平楽、亦謂之五方獅子。獅子攀獸、出於西南夷、天竺獅子等国。綴毛為之、像其俯仰馴狎之容。二人持繩拂、為習弄之狀。五獅子各依其方色。百四十人歌太平樂、舞以足、持繩者服飾崑崙象。」と記され、宮廷で五色獅子舞を行っ

ていた。五方の意味は、改めて述べるまでもなく、中国古代の陰陽五行思想から派生したものであり、獅子に扮した人がそれぞれ青・紅・黄・白・黒の五色の毛で綴った獅子皮を被って、東・南・中・西・北の方位に位置して演じる。真ん中の黄色い獅子は最高権力者の皇帝を象徴している。五匹の獅子が指揮者によって、様々な姿勢をとるとともに、百四十名の歌手が『太平楽』を歌いながら踊るといふ壮観な趣きである。

中国では唐代以降、獅子舞は宮廷から民間まで普及し、また中原から全国へ拡大した。さらに歴代の伝承と取捨によって、次第に多様な民俗芸能に変わり、ついに北獅と南獅の二大流派が形成された。「形」を中心とする北獅の特長に対し、南獅は「意」に重点を置く。そして、北獅には、「文獅」と「武獅」の区別があり、南獅には「喜・怒・哀・楽・動・静・驚・疑」の八態がある。

先に述べた『旧唐書』の記録が、日本の古代に中国から伝来した伎楽の道具の記録（天平十九年（七四七）の「法隆寺縁起資材帳」）にみられる「師子」と重なり、伎楽以外にも古代に日本に伝来した舞楽・散楽に「師子」がみられる。しかし、それ以降の中国の獅子舞の展開が、日本の獅子舞にどのように影響を与えたかはよくわかっていないが、冒頭で述べたように日

本においても獅子舞は、中国と同様大きな広がりを示すのである。

三、寧波市周辺の獅子舞

近年、寧波における獅子舞の育成や継承は、次第に拡大している。寧波市は中国東南沿海に位置し、在籍人口は五七七・七万人（二〇一二年末の統計）、面積は九、八一六万平方kmである。行政区画には、海曙区、江東区、江北区、鄞州区、鎮海区、北侖区、象山県、寧海県、余姚市、慈溪市、奉華市など十一の区県市がある。全市には一六三の街道、七八の鎮、十一の郷と二、五七六の村民委員会がある。

筆者二人は、二〇一一年十月以来、六回の実地共同調査を実施した。調査対象は、現在の寧波市周辺地域における獅子舞の伝承団体の中で、最も長い歴史を持つ寧海県と寧波市北侖区梅山の獅子舞を中心とした。また、橋の竣工行事や会社の開業式などに獅子舞が上演されるが、そのコーディネートをする会社に聞き取りを行った。加えて、元宵節（日本でいうところの旧小正月行事）が、近年市民祭りの様相を呈して盛んになり、そこにおいて日本でいうところの自治会単位で獅子舞を習って上

演しているのでそれを調査した。⁽⁷⁾

以下、寧海県と寧波市北侖区梅山の獅子舞を中心に報告し、検討を加えたい。

(1) 寧海県の獅子舞

寧海県の獅子舞の起源については二つの起源説明伝説がある。一つは、天台大師智顗によって獅子舞が伝えられたという話である。寧海県内には古くから寺院が多く、智顗大師がしばしば寧海県を訪れ、地元の人々に獅子舞の作法を教えたという。もう一つは、鑑真が獅子舞を教えたという話である。鑑真は何度も訪日のため渡海を繰り返したとき、寧海県を経過したことがあり、鑑真の教えによって寧海地域で初めて獅子舞が行われた。その後、廟会を行う際、必ず獅子舞が先導する形で巡行が始まるようになったのだというのである。伝説の真偽はともかく、寧海県の獅子舞に関する文献史料は明代以降のものである。清の康熙年間（十七世紀後半から十八世紀前半）編纂の『寧海県志』風俗には、「正月演劇、敬祖迎神、鄉間十二起、城里十四起、乃十八乃止。」とある。ここの「演劇」とは、竜舞、獅子舞、灯籠舞などの民俗芸能のことを指している。このように寧海県の獅子舞は三〇〇年以上の歴史を持ち、現在では

五十以上の獅子舞団体があるという。

寧海県の獅子舞は、長い歴史をもつことから「獅子舞の故郷」と呼ばれている。その中でも、梅林陳村の獅子舞は特に古くから伝承されてきたと伝えられる。調査を行った二〇一二年一月二十九日（旧暦一月七日）は、寧海県がまだ新年の喜びに浸っている中、梅林陳村の陳昌福さん（調査当時四十七歳）の獅子舞チームは次の出演の準備していた。

寧海県の獅子舞は長い歴史をもつが、梅林陳村の獅子舞は長らく途絶えていた。しかし、別の集落に伝わる獅子舞の師匠から習うなどして、一九五四年に復活することになった。その時のリーダーが昌福さんの祖父であった。その後、昌福さんの父がリーダーを受け継いだ。幼い頃から獅子舞の雰囲気の中で育った昌福さんは、今まで三十年以上獅子舞を演じている。梅林陳村の獅子舞は、一頭の獅子だった編成から、一九七八年に二頭に拡大し、一九八五～一九八九年に行われた二度の寧波市の獅子舞大会に参加し、優秀賞を得て四頭の獅子を授与され、現在では四頭編成の獅子舞となっている。

昌福さんの父がリーダーだった時代は、元宵節前後の一月十四～十八日頃まで他村を回っていた。以前は一月一日と十四日が、それぞれの集落の獅子舞の日だった。獅子舞をまったくの

素人から教えると、舞えるまで一ヶ月は最低かかるが、通常は上演の機会の二週間くらい前から一日二時間くらい呼吸を合わせるための練習をしている。

現在の梅林陳の獅子舞は、動作が多様化し、一見同じように見えても異なる動きも多くなっている。その動作には、伝統的な技法として伝わる「掃場、追殿様蛙、鮎灘、上山進洞、舞拳棒、滾響叉」というものがあるほかに、豪快さと逞しさを表現したものや、「拝観音、踏四角、居眠り、搔痒、舐毛、振毛」などの精細さと静かさを表現する動作もある。基本的な技法としては、

- ① 出洞（穴から出る動作で、まわりを見回す）
- ② 登脚（脚を伸ばす）
- ③ 盤腰（腰を伸ばす動作で、一人がもう一人を抱える）
- ④ 跨膝・施転（首を振る）
- ⑤ 造型（ポーズを作る）
- ⑥ 打滾（体を返す）
- ⑦ 抓痒（痒みをとる）
- ⑧ 瞌睡（眠る）

の八種類があるといい、昌福さんの改良によって、文と武、動と静、拙と巧の動作が組み合わさるように獅子舞に表現され

ているという。陳さんが考え出した独特な新しい技法として、「跨膝施転」（首に跨って回転する）、「獅滾背」（背中から転がる）、「盤腰」（腰を上げる）、「獅子造型」（獅子らしいパフォーマンス）、などがある（写真2参照）。

昌福さんの獅子舞チームは、普段はそれぞれ別に職をもっており、余暇に獅子舞の練習をしている。彼の祖父の世代では、六十人ぐらいのメンバーがいたが、父の世代になると三十人に減少した。さらに、現在では獅子舞のメンバーは二十人しかないのだという。



写真2 梅林陳の獅子舞

二〇〇七年に寧海県第一職業中学校は、寧海獅子舞の伝承地であるということから獅子舞をカリキュラムに編入した。それ以降、昌福さんは、学校の運動場で週に二回獅子舞の指導を行っている。中学生たちには、太鼓の叩き方や踊りの基本的な技法を教えている。

こうした生徒たちは四十人くらいいて、行事や祭りの時には獅子舞チームに参加してもらっている。寧海県第一職業中学校は、獅子舞伝承者を育成する文化的基地としての役割を果たしているともいえるが、農村部の若者の都市流入の傾向は強まっており、彼らが伝承者として戻ってきてくれるかは大きな課題だという。昌福さんと彼の獅子舞チームは、二〇一一年十一月に行われた寧海県の獅子舞大会で優勝している。要するに、伝統ある寧海県の獅子舞の中で、最も優れた技量の獅子舞チームと認められているのである。そんなことから、度々寧波、奉化、鄞州、紹興、杭州などへ招聘されて、大変人気を集めている。

(2) 寧波市北侖区梅山の獅子舞

梅山は寧波市北侖区に位置し、内陸に隣接しながら、東シナ海と繋がっている小島である。梅山の獅子舞は清末より始まり、今まで一〇〇年以上の歴史を持っている。その始祖は沈天童という人であり、清の道光年間（一八二一～一八五〇年）のこととして、次のような伝説的な逸話が伝わる。

頻繁に襲来する海賊に悩まされた梅山の人々が、海賊と強

盗の危険を軽減するため武術を習い始めた。その中で、沈天童の武術が最も優れていた。そして、武術訓練の中で、村人に自信と勇気を持たせるため、獅子を飾り、獅子舞を習った。海賊が来襲すると、村人が扮装した獅子を先頭に出し一斉に戦った。獅子の先導が非常に効果的で、それ以降、海賊たちは梅山の獅子が出動したと聞くと、すぐに撤退するようになった。その外敵と戦うことで生まれた人間の扮する獅子は、梅山島の獅子舞の源流となり、沈天童も梅山獅子舞の始祖となった。村人は彼を讃えて「天童大君」と呼んだ。

という話である。現在、梅山獅子舞は、祝祭日、婚礼、出産祝い、満月、誕生祝い、式典などの機会に披露されている。

現在の「教練」（責任者・隊長）の沈海迪さんによると、梅山獅子舞の特徴は広東省の「南獅」の技法に加えて、地元の武術の要素を取り込んで発展してきたことだという。この梅山獅子舞チームは、現在「寧波獅王」と称しているが、二〇〇五年までは「梅山精武獅隊」と呼ばれていた。もともと梅山は中国拳法の宋派（『水滸伝』の宋江が始祖）発祥の地といわれ、梅山の獅子は拳法の技芸から変化してきている。その拳法と獅子

舞の始祖と伝えられるのが、先に記したような伝説が伝わる沈天童である。現在の教練の沈海迪さんは、その六代目である。

海迪さんは、一九八一年生まれの若き獅子舞指導者であるが、八歳の時から獅子舞を始め、小学校卒業後寧波体育学校に入学した。梅山には小学校と中学校があるが、小学校で武術を習い、中学校で獅子舞を習っている。このあり方が獅子舞の伝承には効果的で、小学校で武術を習うことで体力的な基礎ができ、獅子舞にうまく移行できるのだという。梅山獅子舞のメンバーは全部で三十人から五十人を数えるが、そのうち十八人はプロ（他に職業を持たない人）として活動している。

獅子舞に用いられる楽器は、鼓・銅鑼・釵（拍子木のようなもの）の三種である。芸態としては、獅子の動作と習性を取り入れた、次のような八つの形態を中心に舞うという。

- ①「喜」態。獅子が獲物を見つけた時の喜んだ様子。
- ②「怒」態。獅子が橋を渡る時、水中の自分の影を見て感じた憤怒・焦燥の表情。また、立ち上がった勇ましい姿。
- ③「哀」態。獅子が何らかの理由で挫折して様子を表した悲しみの様子。
- ④「楽」態。獅子が柱の上を飛び移ったり、水遊びを楽しんだりする様子。

⑤「動」態。獅子が転げ回ったり、頭を振ったり尾を揺らしたりする活発な動作。

⑥「静」態。獅子が疲れて休む状態。

⑦「驚」態。獅子が驚いて怖がる様子。

⑧「疑」態。獅子の本性は疑り深い。獲物を食するとき、貪る時の慎重な様子。

梅山獅子舞を代表するのは、「採青」と「点睛」という演目である。「青」とは、本来は「生菜」（生野菜）のことであり、それが「生財」と同音なので表現をぼかすために借音して用いた表現で、金儲けを意味している。「採青」という動作は、結婚式の主人がお金を野菜に包んで高いところに吊るし、獅子に取ってもらう。しかし、その「青」はなかなか容易には採れない。獅子がまずパフォーマンスし、いろいろな困難を経てようやく「採青」できる。「青」を採ってから、主人側に吐き出し、主人がその「青」をもらうと皆円満に「福」をもたらすというように考えられている。また、「採青」の由来については、清代に創出された動作だから、「青」は「清」と同じ発音で、「採青」は「採清」であり、清朝を打倒する意味も含まれるという。⁽⁸⁾一方、「点睛」という儀礼は、主人が朱砂で獅子の目に付けることによって、神の魂をもらい、吉祥如意を象徴す

るものといわれている。

それから、柱の上で舞う「梅花柱」という演目がある。高さが80cm、3mの数本の柱を1.8、2.8m間隔に立てて、それぞれの柱の上に直径38cmの円盤を載せたというものを舞台にして、その上で獅子が舞うというアクロバティックなものである。この「梅花柱」という演目は、もともとは武術の技の名称だったという。

二〇一一年十月一日に、寧波市北侖区の婚姻儀礼で梅山獅子舞が披露され、筆者二人はそれを調査した。この時の獅子舞は、婚姻儀礼の一部として機能していて、「嫁迎え」と「披露宴」の時に演じられた。

午前八時半、新郎と家族、婚礼会社の人々が約束した場所に集まり、嫁迎えの準備を整える。新婦を迎える行列は、先頭が銅鑼を鳴らす二人で、次の二人が「喜」と記された看板を掲げて続く。次に獅子舞の楽隊、その次に赤色と黄色の雌雄の二頭の獅子、その後八人で担ぐ新郎が乗る御輿で構成されている。新郎は、竜袍を着用し、頭に状元の帽子を被り、足に刺繍の靴をはく。他のメンバーは明朝風の官服を身につけている。パレードがスタートすると、演奏の音、銅鑼を鳴らす音、爆竹の音が街に響き渡る。



写真3 梅山の獅子舞（結婚式の行列）

い、町中を一回りして披露宴のホテルへ向かった（写真3参照）。ホテルで行われた披露宴の獅子舞の演出は、結婚を祝う趣旨をこめた内容となっていて、三つの部分に分けて舞う。

第一部は挨拶である。獅子は太鼓の音に伴い出席者に挨拶してから、舞台上で一回りして周囲を観察しながら、警戒するようになら進む。獅子の動きや進み方は太鼓のリズムによって決められ、太鼓の叩き方も「擂鼓」「菊鼓」「遅い鼓」「速い鼓」「前鼓」「中剪鼓」「片足鼓」「大頭仏鼓」などがあり、十種類

この際の獅子舞は、梅山獅子舞のメンバー八人で構成されていた。楽隊が四人、獅子の扮装者が四人で、二人で一頭の獅子となって舞う。新婦迎への行列は、2kmぐらい進んで新婦の家に着く。新婦の家で様々な儀礼を行った後、新婦を御輿に乗せ、金童玉女が先導し、新郎は歩いて付き添

上の変化に富んだ叩き方になっている。

第二部は祝いの本舞である。披露した技法には「破陣」「噴水」「尋青」「見青」「疑青」「食青」「酔青」「吐青」などがあり、それに応じた太鼓の叩き方には「七星鼓」「菊頭鼓」「水遊び鼓」「試青鼓」「擂鼓」「擊鼓辺」などがある。

第三部は結びである。舞い方が「口洗い」「足洗い」「痒い掻き」「転がり」「拝謝」で構成されているが、他の二部同様に太鼓の叩き方もそれぞれの動作に応じて変わる。

(3) 元宵節の梅山系獅子舞

寧波市各地では、正月元旦から十五日にかけて、千件以上のイベントが行われる。特に元宵節（一月十五日）の前日から当日にかけては、獅子舞が披露されるイベント的な祭りが行われている。主催は行政区である場合が多いが、その行政区の中の住民が様々な催し物を演じる形式となっている。特にその中心的役割を果たすのが党工委辦事処（文化センター）である。

① 鎮海区庄市街道の元宵節イベントの獅子舞

元宵節のイベントの一つである鎮海区庄市街道の元宵節イベントを、二〇一三年二月二三日に調査した。このイベントの企画運営を行った庄熙定処長と陳啓揚副処長によると、この企画

は街道単位で立案し、それを市の文化局に申請して許可を得る。経費は基本的には街道が負担するが、街道に競わせて優秀なところには市の文化局が出してくれるのだという。この年度のイベントについては、二ヶ月前（新暦十二月）からプラン作りをした。舞台演出を行うこととし、出し物としては中国の民俗的な芸能（農村の民俗芸能）や庄市街道の代表的な民俗芸能を選んだ。例えば、江南地方の芸能を用いる場合には、歌詞を寧波方言に変えて演じるのだという。この年の出演者は三〇〇人ほどで、農民や定年後の人が多い。年齢は若い人から老人の人までいる。この時に出演した獅子舞は二チームで、一つは沈海迪さんの梅山獅子舞チームで三頭の獅子、もう一つは電機会社のチームで二頭の獅子が出演した。この電機会社の獅子舞も海迪さんが教えたものである。獅子舞は、庄市街道には二、三チームあるが、鎮海区では他には伝わらないという。庄市街道の獅子舞は古くからあったもので、結婚式とか葬式で演じられ、正月には門付けのように各戸を回っていたという。ただ、現在では独自の獅子舞ではなく、梅山獅子舞の海迪さんに習った獅子舞を演じている。

② 大榭島の元宵節イベントにおける獅子舞

二〇一三年二月二四日の大榭島元宵節において、大榭街道党



写真4 大樹島元宵節舞台上の獅子舞

ものもある。この年度に出演したのは以下の出し物と団体である。

- 1、赤旗・官灯隊（区老年総会・46人）
- 2、女子舞龍隊（海湾社区・56人）
- 3、威风鑼鼓隊（海城社区・45人）
- 4、扇子舞隊（海信社区・60人）
- 5、鼓閣・台閣隊（榭南五村連合・50人）
- 6、軍樂隊（海韵社区・26人）

工委辦事処が主催したイベントでは、パレードと舞台演出が実施された。このパレードとは、舞台上で上演する団体が行列を組んで大樹街道内を巡行し、所々でそれぞれの芸能を演じるというものである。この団体とは大樹街道内の様々なグループで、自治会や老人クラブ、婦人会組織のような

- 7、武術隊（区老年総会・46人）
- 8、吉祥腰鼓隊（海湾社区・47人）
- 9、十二生肖隊（海城社区・40人）
- 10、軍樂隊（海文社区・40・45人）
- 11、体操隊（海浪花・60人）
- 12、卡通隊（海信社区・42人）
- 13、迎親隊（金海岸社区・50人）
- 14、体操隊（海文社区・60人）
- 15、老年鑼鼓隊（区老年総会・50人）
- 16、車子・馬灯・群芸隊（榭北四村連合・60人）
- 17、秧歌舞隊（海浪花・56+56人）
- 18、舞鳳隊（海韵社区・28人）
- 19、西遊記隊（金海岸社区・8人）
- 20、舞獅隊（金海岸社区・20人）

これを見ると、先に庄市街道の元宵節イベントについて演出者の意図を紹介したが、いかにも中国的な民俗舞踊を取り込んで作られていることがわかる。

舞台は大樹中学校運動場に作られて、最後に獅子舞が上演された。六頭の獅子が一斉に披露される演出で、演奏者などを含

め金海岸社区二十人の構成で行われた。獅子の容姿と獅子舞の技法は、梅山獅子舞に習ったものである（写真4参照）。このように梅山獅子舞は、現在寧波市周辺の様々な機会に上演される獅子舞を指導しているのである。

(4) 寧波市周辺の獅子舞の特徴

中国における獅子文化は古くからあり、それは現在に至るまで深く生活に密着している。そして、そのことはここに記したように寧波市周辺にも確認できる。また獅子舞も同様で、中国全土に早くから広まり、今日の寧波市周辺の獅子舞は地域の伝統芸能として、婚姻や葬送儀礼の中で伝えられている。また、一方で急速に都市開発が進む中で、行政が企画するイベントに民俗的な出し物としてよく取り上げられている。特に春節・元宵節は本来獅子舞が演じられる年中行事で、その中で企画されるイベントの中で中心的な演目として上演されている。今回の調査では二通りの伝承が確認でき、一つは梅山の獅子舞のように地域に伝承されている形で、もう一つは伝統的な伝承者を伝統技術保持者として行政で保護して日本流に言えばプロ化し、地域の芸能の伝承の指導をさせているという方である。興味深いのは、前者が人口の増え続ける中国においても日本と同

様に都市に人口が移動して、かつての獅子舞伝承地は後継者確保に苦慮しているということで、またその解消のために日本と同様に獅子舞を学校教育に取り込んでいくということである。

加えて、寧波の獅子舞で注目したいのは、中国でも実際には生息しない動物の獅子の生態を細かに分類し、技として表現し伝承している点である。そして、獅子に入る二人の人が、アクロバティックに絡まって構成する芸となっていることである。

また、日本に多い幕の獅子ではなく、着ぐるみ形状という点とも特徴の一つである。

結—獅子舞の比較文化的研究へ向けて

前節にまとめたように、寧波市周辺の獅子舞の芸態の特徴は、獅子の生態を細かに分類して技として表現していること、獅子の形状も日本の一般的な幕ではなく着ぐるみ形状であり、二人のアクロバティックな芸態となっていることである。

日本における獅子舞にも、アクロバティックなものがあり、多くそれは「伊勢大神楽系の獅子舞」と説明されているが、明らかにそれとは異なる獅子舞がある。例えば、静岡県南伊豆地方には二種類の獅子舞が伝承されており、それぞれを「神楽」



写真5 石廊崎の籠獅子

「籠獅子」と称している。前者は幕を用いる獅子舞であるが、後者は着ぐるみでありアクロバティックな芸態で明確に区別されている(写真5参照)。また、籠獅子では細かな獅子の生態を表現した技を伝えている。その一つの下賀茂の籠獅子を例にとると、雌雄別に「あくび(雌)」「頭立ち(雌)」「背中立ち(雌)」「花食い(雌)」「舐めたり搔いたり(雌)」「雌休み(雌)」「負い投げ(雄)」「腰回し(雄)」「一本杉(雌雄)」「囃み合い(雌雄)」「盛り(雌)」「休み(雄)」「四つ返し(雄)」「横車(雄)」「肩車(雄)」「負い投げ(雄)」という十七種の技を伝えている。⁽⁹⁾「籠獅子」という名称は着ぐるみ形状であることを示しており、この名称は熊本県八代妙見神社祭礼の獅子にも確認できる。

筆者が目ざすものは、海の道が日本と中国の唯一の道であつ

た時代において、中国側の玄関であった寧波市周辺の獅子舞を手がかりに、これと日本の獅子舞とを比較検討するところにある。そして、寧波市周辺の獅子舞の特徴としては、〈細かな生態を表現する技〉の存在と、〈着ぐるみ〉で〈アクロバティックな技の構成〉ということがあげられる。また、その研究の目的は単に獅子舞の芸態比較にとどまらず、その伝承母体や背景を比較検討する比較文化論を目ざしている。

本稿では、もはや日本の獅子舞において、寧波の獅子舞に類似しているものとを比較検討する余裕はないが、例としてあげた南伊豆以外にも日本に同様な芸態をもつものは少なくないということを最後に記しておきたい。

注

- (1) 木村直弘「哭き祭の音風景―平泉に残る「哭」の静かなる余韻」(静永健編・小島毅 監修『海がはぐくむ日本文化』、東京大学出版会、二〇一四年)ほか、木村の平泉の哭き祭と中国葬送儀礼の比較研究の諸論文。
- (2) 宮尾慈良「中国の獅子舞―北獅と南獅」『アジア演劇人類学の世界』、三一書房、一九九四年、一六四頁。
- (3) 林士民、林浩著『中国越窯磁』(上)、寧波出版社、二〇一二年、二四七頁。

- (4) 山川均「中世石造物の研究…石工・民衆・聖」(『日本史資料研究会選書2』、日本史料研究会出版、二〇〇八年、一三～三九頁)。
- (5) 奈良国立博物館編『聖地寧波』、奈良国立博物館、二〇〇九年、三〇九頁。
- (6) 羅斌・朱梅『舞竜舞獅』、中国文联出版社、二〇〇九年、七四頁。
- (7) ①二〇一一年九月三十日～十月一日・寧波演出公司(イベント演出会社で聞き取り)、寧波市北侖区の婚姻儀礼における獅子舞(上演の際の实地調査)。
②二〇一二年一月二十九～三十日・寧海県梅林陳村(寧海県獅子舞伝承者陳昌福さんからの聞き取りと練習の实地調査)、寧波市内ホテルで聞き取り(北侖区梅山鎮獅子舞伝承者沈海迪さんからの聞き取り)。
③二〇一三年二月三～四日・鎮海区庄市街道の元宵節(庄市文化センターの責任者から聞き取りと沈海迪への挨拶、庄市元宵イベントの獅子舞の实地調査)、寧波市大榭島の元宵節(大榭開發区元宵節のパレードとイベントの芸能の实地調査)。なお、これらの調査は盛岡大学学術研究助成費の助成を受けて実施した。
- (8) 張玉玲「在日華僑の「中国文化」観と華僑文化の創出」(『国際開発研究フォーラム』第二十三号、名古屋大学大学院国際開発研究科、二〇〇三年、一三三頁)。
- (9) 吉川祐子「下賀茂の神楽と籠獅子」(吉川編『下賀茂の籠獅子と神楽—静岡県賀茂郡南伊豆町—』、民俗文化研究所、二〇一〇年、五八頁)。